

公開座談会

マーシャルアーツ（武術）とイスラーム

第一回レポート 木村風雅

「イスラームと〇〇」という問題設定はこれまで日本においても数々試みられてきた。しかし、「イスラームと武術（または武道）」の関係に着目した試みは未だ十分には進められていない。

一方、日本国外に目を向けると、「イスラームと武術」の関係に注目する研究やムスリム知識人の説教、また教育プログラムが点在している。たとえば、オタワ大学（カナダ）の Douglas S. Farrer がインドネシアからイギリスにまで展開するムスリム武術としてのシラットとスーズィズムを紹介した研究書（『Shadows of the Prophet: Martial Arts and Sufi Mysticism (Muslims in Global Societies Series), Berlin: Springer, 2009』）では、単なる

戦闘術としての武術ではなく、宗教的霊性を練磨するための修養の術としてのムスリム武術が日本の武道になぞらえて分析されている。Farrer が分析しているナクシユバンデイー教団を通じて展開しているシラットの技術は、イギリスのムスリム武術家 Abdur Rahman Blanchette によって、ムスリムの宗教儀礼（祈りの前の浄め）を理解するためのツールとして紹介されている。¹⁾

また、アメリカでムスリム向けのカレッジ（Zaytuna College）を運営する説教師のハムザ・ユースフは「武道精神（the martial spirit）」と銘打った最新の説教において、ウンマ（ムスリム共同体）を守るために各ムスリムが身体を鍛えることは預言者の時代からのスンナ（模範的慣行）であることを主張し、ムスリムの身体練磨が宗教的精神性や霊性を高める試みと切り離せないことを日本の武道を例にとつて説いている。²⁾

これら世界における「イスラームと武術」の連関をイスラームの歴史を振り返ると、預言者ムハンマドが彼の弟子のルカーナ（Rukaba ibn 'Abd al-Yazid, d. 662 or 663）とレスリングを実践していたことや、スンナ派四大法学祖の一人であるシャーフイーが学問へ捧げた情熱と同じだけの情熱を弓道（rany）に傾けたことから、「文武両道」の伝統がイスラームにも見出されるのではないかとの問題提起が本公開講演ではなされた。

二部制講演の初回にあたる今回は、日本におい

てブンチャク・シラット（Pencak silat）の普及に尽力している早田恭子氏の講義と実演を中心に、日本とインドネシアに加え、トルコやシリアにおいて特にムスリムの教育現場において武術や武道に期待されている役割とは何かを討論した。

木村風雅（きむらふうが）

ROUND TABLE TALK
MARTIAL ARTS AND ISLAM
1ST HALF
10.29 13:00-15:00
特別公開文化講座
公開座談会
マーシャルアーツとイスラーム
【前半戦】
申込不要・参加無料
会場：東京ジョーモイ
新宿 3F エルトゥラルム講堂
contact: institute@tokyocami.org

[1] <https://www.youtube.com/watch?v=flptv0ZNTgY>

[2] <https://www.youtube.com/watch?v=X1JLPxCInbQ&t=133s>